

けんしゅう だより③



中央中等教育学校 授業研究・FEWC 推進部

新しい学びのための授業改善研修 第3号 令和8年1月6日発行

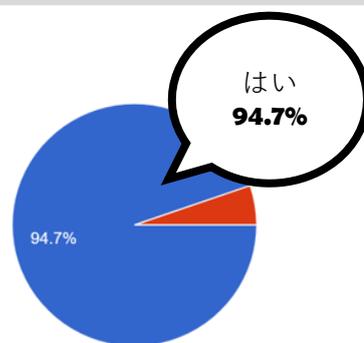
＊授業別グループ協議および教員アンケートをもとに作成しています。

＊スペースの都合上、ご意見を合わせたり、編集したりさせていただいた部分がございます。

校内研修テーマ：『学習の個性化』を伴った探究的で創造的な学習の導入

1. 授業研究会後のアンケートより

Q.本年度、「学習の個性化を伴った探究的で創造的な学習」を行う授業をデザインされましたか？



授業改善の取り組みに関する自身の課題と今後の抱負

1. 基礎的な知識・技能と探究的・創造的学習の両立

・基礎的な知識・技能を確実に身につけさせる時間と、探究的・創造的な活動の時間とのバランスをどのように取るかが大きな課題である。

・知識を理解する段階で思考が止まらないよう、学んだ内容を活用し、自分の考えを深めたり発展させたりする発問や活動を工夫していきたい。

・「わかる」という実感と、「できるようになる」「改善できる」という成長を、授業の中でどのように保証するかを引き続き検討していく。

2. 「学習の個性化」の位置づけと実践方法

・「学習の個性化」をどこまで、どのように取り入れるのかについて、教科特性や生徒の実態を踏まえた自分なりの基準を明確にする必要がある。

・選択課題やレベル別課題は有効である一方、学力が十分でない生徒への支援や、安易な選択に流れないための工夫が求められる。

・生徒が自分で考え、適切に選ぶ力を育てることを、個性化を進める前提として意識していきたい。

3. 探究活動の授業内設計と「収束」の工夫

・課題設定から探究、まとめ・表現までの流れを、授業内で安定して成立させることが難しい。

・探究活動を1時間の授業、あるいは単元の中でどのように展開し、どこで収束させるかをより明確にしたい。

・探究の成果を知識の定着や次の学びにつなげるための整理や振り返りの方法を研究していきたい。

4. 生徒の実態差を踏まえた授業デザイン

- ・学力差が大きい中で、どのレベルまで丁寧に扱うか、その塩梅が難しい。
- ・中間層への配慮と、創造性や主体性を引き出す活動との両立が課題である。
- ・協働的な学びや話し合いの良さを生かしながら、個性化が機能する場面を意図的に設けていきたい。

5. 時間配分・評価・フィードバックの改善

- ・探究的・創造的な学習には時間がかかるため、授業時間内での配分を引き続き工夫する必要がある。
- ・生徒一人一人の学びの状況を把握し、適切に評価・フィードバックする方法を改善していきたい。
- ・生徒の発言や成果を整理・共有し、学びを全体に還元する工夫を今後の課題とする。

2. 学年別協議

1 学年 バドリック先生(英語)

- ・英語を話したり聞いたり、英語を浴びている時間が長く充実している
- ・先生がジェスチャーをしたり動きを入れたりするために生徒の顔が上がる
- ・Talk and Talk ではただ読めばいいというのではなく、主語や動詞を変えることで考えながら話すため頭を使う課題設定となっている
- ・英語の学習に抵抗のある生徒もいるが、小学校でやっていたようなビンゴやペア活動などで興味関心をもたせられるものとなっている

2 学年 高柳先生(社会)

- ・ベン図を紙ベースで行ったことで、実際に書く・触るという感覚が生まれ、探究に主体的に取り組んでいた。
- ・デジタルツールも有効だが、今回は一人で自由に書き込み、その後グループで意見をすり合わせる流れが適していた。
- ・個人思考からグループ共有へと展開することで、見方や考え方が広がっていた。
- ・他者の意見から学ぶ姿が見られた。
- ・他者の意見を色を変えて書く工夫により、自分の思考の変化も可視化されていた。
- ・付箋など、操作性のある教材を用いることで、さらに思考を深められた可能性がある。また、今回の内容に対して、ベン図という思考ツールが最適だったかについては今後の検討課題である。
- ・グループ分けや活動の進め方について、もう少し具体的な指示があると、一人ひとりの探究がより深まったと考えられる。
- ・教室環境の工夫として、机を向かい合わせてのグルーピングや、テーマ別に話し合う場を設定する方法も考えられる。
- ・クラス全体の雰囲気良く、生徒が安心して意見を出し合える学習環境が整っていた。

3学年 レチャー先生(英語)

◎探究的な活動を行うための丁寧な段階をふむ指導。

- ・最後のアクティビティにもっていくためのパターンプラクティス(構成)がよく行われていた。
- ・基礎・基本の習得を図る十分な時間が確保されていた。
- ・スライドに日本語を入れるなどの、低位の生徒に対する支援があった。
- ・生徒の実態に応じた教師の促しやサポートが丁寧であった。

※英語を使えば使うほど、すらすらでてくるようになる。それまでは教師がひっぱっていくことが大切なのは。

◎探究活動を行うための興味をひく課題設定。

- ・1つのイラストからいろいろなシチュエーションが考えられる教材であった。
…活用ができる教科もあるのでは。

◎生徒に選択する機会を多くもたせていた。

- ・学ぶ相手の選択等の選択の機会があった。
- ・生徒が選択しているという実感がもてるような工夫がされていた。

※実は教師が意図している中での生徒の選択…!

◎安心して学べる環境づくり。

- ・生徒の名前をきちんと呼ぶという生徒が安心して学べる環境づくりがされていた。
- ・活動が多いながらも、やること、流れがしっかりと示されていた。
- ・生徒にとって自然なサイクルで学習が進められていた。

◎1時間集中して学べる工夫。

- ・途中で席を動かす(体を動かす)活動を入れたことによって、生徒がメリハリをつけて学習に参加できていた。

◎英語に親しめる環境づくり。

- ・丁寧なネイティブな英語のシャワーを浴びられるすばらしい環境であった。
- ・常に対話をしている授業であった。

4 学年 武内先生(英語 I)

・教科書 Lesson の登場人物の心情について、生徒が自ら考え、整理し、発表する活動が行われていた。

・問いが「自分ごと」として設定されていたため、生徒が主体性をもって積極的に活動に取り組んでいた。

・生徒の視点を意図的に変えることで、問いをより身近なものとして捉えさせ、思考をさらに深めることができると感じられた。

・「まとめ・表現」の段階では、教員が答えを提示して活動を収束させたくなりがちである。しかし、問いの設定によっては答えが一つに定まらない場合も多く、複数の考え方があることを示すことが重要である。

・多様な考えを共有したうえで、生徒にさらに思考させる活動展開も可能であると感じた。

・「整理・分析」の段階でグループ活動を行う際、学力差のある生徒への対応が課題である。基礎事項の定着が十分でない生徒が増えており、学力差が以前より大きくなっている点が懸念される。

5 学年 吉井先生(地理)

- ・内容に発展性があり、授業後も考えが広がった。興味を喚起する楽しい授業であった。
- ・勉強内容のつながりが自然で、学びを楽しめる構成になっていた。
- ・発問のタイミングや間が適切で、生徒の思考を促していた。
- ・生徒との対話を重視し、キーワードによるヒント提示が効果的だった。
- ・授業者の存在感やリズム感があり、授業に集中しやすかった。
- ・生徒が主体的に考えるための準備が丁寧で、内容も分かりやすかった。
- ・身近な生活と結びつけることで、「自分ごと」として学べる授業になっていた。
- ・探究活動で得た内容を知識として整理し、その知識を用いて考察するサイクルが機能していた。
- ・このサイクルを身につけることで、生徒の自立した主体的な学びにつながると考えられる。
- ・ワークシートはよく工夫されており、必要最低限の情報に絞られ、実用的であった。

6 学年 須長先生(世界史)

- ・生徒が学んだことを活かせる場面を設定すると、普段は発言の少ない生徒も発言するようになることが分かった。
- ・授業後、生徒がどのように思考を深めていくのかに関心をもった。
- ・授業全体を通して、生徒の成長を実感できた。
- ・多文化共生の定義については、生徒は概ね理解していた。
- ・一方で「個性化」については、「学べること」や「一生懸命取り組めること」に生徒自身が気づく点に意義があると感じた。
- ・授業のまとめをグループ発表にするか、個人発表にするかは、常に悩ましい課題である。
- ・成功例・失敗例を挙げて考えさせる構成はできていたが、十分にまとめ切れていなかった可能性がある。
- ・「宗教はなぜ分化していったのか」など、さらに問いを深める余地があったと感じた。時間不足も一因である。
- ・世界史の授業でグループ発表を行うのは初めてだった。
- ・発言が理解の深い生徒に偏りやすく、協働的な学びを個性化につなげる難しさを改めて感じた。